

## 徂徠學「文論」に於ける韓愈・柳宗元

白石眞子

### はじめに

荻生徂徠（一六六六—一七二八）は、古言・古文の修得を目指した初學者の爲の書『四家雋』に於いて、明代古文辭の李攀龍・王世貞とともに、唐代古文の韓愈・柳宗元の文章を選び收めている。そもそも明代の古文辭學派は、晩年王世貞の取つた立場（調劑）を除き、唐代古文を斥けるものであつた。古文辭を標榜する徂徠は、何故に明代古文辭とは相容れない韓・柳の古文を取り擧げるに至つたのであろうか。徂徠はそのことを論じていないように思われる。その點、徂徠の門人たちはどのように受け止めたのであろうか。

本稿では、徂徠の古文辭學の形成期からその高弟として關わつた服部南郭（一六八三—一七五九）、山縣周南（一六八七—一七五二）、太宰春臺（一六八〇—一七四七）の文論に關する著作を取り擧げ、徂徠學に於いて韓・柳が如何なる意味を以て捉えられているのかを検討したい。

### 第一章 徂徠文論に於ける韓柳と李王

『四家雋』は、寶曆十一年（一七六一）に宇佐美瀧水、大内熊耳の

序を附して刊行された。校閲を擔當したのは、春臺、南郭、瀧水の三名で、中でも春臺は、韓・柳の文を校閲したことが書簡より分かる。全六卷から成り、うち卷一・二が韓愈（七十篇）柳宗元（二七篇）、卷三以降が李攀龍（五七篇）王世貞（八六篇）の文で構成されている。収録の體裁は、四家の文を十九の文體に分けて順に並べたもので、文には句點が施され、上の欄外には徂徠による評がある。ただし、上の欄外の評は卷五以降にはほとんど見られない。これは南郭の「物夫子著述書日記」（『中庸解』付載、『瀧水叢書』雜著所引）に「四家雋、右評未全備」とあることと合致する。

瀧水の「刻四家雋序」は『四家雋』の刊行に當つて、徂徠の學的立場と方法を徂徠の言として三條を引いて明示しようとしている。

(a) 先生嘗て人と文を論じて曰く、六經は辭なり。法は具に在り。

西漢以上此を以て其れ選ばれたるなり。降りて六朝に至り、辭弊れて法病む。唐の韓柳二公古文を倡へ、一に法を古に取る。其の辭を細くる者は、六朝の習を矯むればなり。然れども文章の道の本然に非ず。故に二公時有りて辭を修む。宋の歐蘇有りと雖も、其の文理を以て勝ち、必ずしも法あらず。又辭を修むるを事とせず。故に取らざるなり。明の李王二公古文辭を倡へ、亦た法を古

に取る。其の之を古文辭と謂ふ者は、辭を尙ふなり。敘事を主とし議論を喜ばず。亦た宋の弊を矯むるなり。

この「管輅人論文曰」は「答屈景山書」(第一書)に據るものである。この書簡は享保十一年(一七二六)七月・八月、藤原惺窩の高弟堀杏庵を曾祖父に持つ堀景山(一六八八—一七五七)と交わした書簡「屈物書翰」としても傳わるもので、徂徠六十一歳、景山三十九歳、景山からの問いに徂徠が答える形で往復している。この答書は「徂徠先生學則」付録にも收められ、徂徠の晩年の學問的立場、とくに文論がテーマとなっている。瀧水もまたこの書簡によつて、韓・柳の古文と李・王の古文辭について徂徠の考えを明らかにするのである。景山の「與物徂徠論文書」第一書は、「古の文は已むを得ずして已まざるに出でざるはなし」とし、それ故に文には「一氣」が貫通しており、「文章は必ず一氣を以て尙しと爲す」と主張する。こうした立場からすると、李・王の文章は文辭を巧みに綴り合せるが實に讀みづらいもので、一氣の貫通によつて人を感動させるのは韓・歐の文章の方だとして、唐宋の韓・歐の文を斥けて明の李・王の古文辭を専ら學ぶことについて、徂徠に疑問を投げかけるものであった。

徂徠は「六經辭也。法具在焉」と六經を辭と規定し、そこに法が具備すると捉えて、そこから後世の文のあり方を論ずる。六朝に至つて「辭弊而法病」という状況の中で、韓・柳が古文を標榜し、文の法を古に求め、六朝の文が修辭偏重であつた爲に修辭は信えなかつたとしてゐる。しかし修辭を斥けているのは文章の道として本來の姿ではなく、韓・柳にもまた修辭の文章もあるとする(書簡では韓・柳の文數篇を挙げる)。また、宋の歐・蘇は韓・柳に學んだもので、道理が先に立ち法があるとは限らず、辭を斥けたので取らないとしてゐる。そし

て李・王については、宋の弊を矯めたという視點から、修辭・敘事を尊び古文辭を信えたと評價するのである。書簡では續けて、「夫れ後世の文章の士、能く卓然として古に法る者は、唯だ韓柳李王の四公のみ。故に不佞嘗て四大家雋を作爲して、以て門人に誨ふ」と、『四家雋』編纂に及んでいる。四家を並稱してはいるが辭を重視する李・王の方を推獎する。しかも注目すべきは、「其の尤も李王を推す者は、辭を尙べばなり。然れども、不佞の二公を推す所以の者は、特だ此のみならず」と李・王の評價が修辭上のことのみではないと言つてゐる點である。

瀧水の「序」もまたそのことに言及する。徂徠の古文辭の教えとして明代古文辭家が尊重した「六經十三家」(後述)の外、この四家のみであるとし、その上で『四家雋』は文章の爲のみではないと、「先生の言」として次の二條を示している。

(b) 李王二家の書を讀み、始めて古文辭有るを識る。是に於いて六經を取りて之を讀む。稍稍、物と名との合するを得たり。物と名と合して、而して後訓話始めて明らかに、六經得て言ふ可し。

(c) 李王力を文章に用ゐる。予其の學に藉りて以て經術を窺ふ。故に從游の士をして二公の業を學ばしむる者も、亦た其の驗する所を以て之に教ふるなり。

(b)は『辨道』第一則、(c)は先の(a)と同じく「答屈景山書」に據る。李・王の書を受容と自らの古文辭學の形成、また李・王との學的地位の違いを端的に言つたものである。徂徠にとつて古文辭學は、六經をはじめとする古書を傳注に依ることなく讀み解くという方法を示唆する學問であつた。李・王は生涯を文章の道に費し、經學には及ばなかつた。自分は李・王の學によつて經學の一斑を窺い知ることができ

た。徂徠が從學の士に李・王を學ばせるのは他でもない、經學の一斑を知らしめんが爲であり、自らに有効であつた學問を以て教えようとして李・王の文を推稱しているのである。古文のみならず經學理解を視野に入れ、李・王の文をその階梯として捉え評價している。

瀧水「序」は續けて、「學ぶ者、先生の意を體すれば、復古の業其れ何事か濟らざらん。李王の文讀まざる可からず」と述べる。瀧水はまた李攀龍の文六篇を收める『古文矩』の序で、「今、吾黨の士、古文辭を學ばんと欲する者は、當に先づ四家傳を讀むべし。能く四家傳に通ぜんと欲する者は、當に先づ此の書六篇を讀むべし」と述べ、これが徂徠の意圖であるとしている。それでは、韓・柳の文をどのように學べばよいと考えているのだろうか。

徂徠は『四家傳』に收める「答李翊書」（『韓昌黎集』卷十六）の欄外評に「道を論ずるは、原道。文を論ずるは、此篇。唯だ二篇を以て韓を盡す可し」と言うも、それ以上詳細な言及はない。『四家傳』には、韓・柳、李・王の文を收めるも、韓・柳の文章をどのように位置づけ、學ぶべきなのかという具體的な文論がほとんど展開されていない。門人たちはそれをどのように理解したのであろうか。瀧水は『瀧水雜著』の中で、南郭『燈下書』と周南『作文初問』を、「物家學流ノ案内ノ好書ナレハ、是ヲ能ク讀テ合點スヘシ」と評している。以下、この兩書とさらに春臺『文論』について検討を加えたい。

## 第二章 南郭『燈下書』に見る韓柳

南郭『燈下書』は、享保十年（一七二五）に成立したとされ、徂徠が景山と書簡を交した前年ということになる。『燈下書』については従來の研究で様々な言及がされているが、徂徠の「蓋し古文辭の學

は、豈に徒だ讀むのみにあらんや。亦た必ず諸を其の指より出ださんことを求むるなり」（『答屈景山』第一書）との考えと同様、詩文を書くことを目的とした書といえよう。全十五條より成るが、その中で文論といえるのが第一條から第九條である。南郭は、「文章ハ學力ト人オト兼合候事」（第一條）とした上で、まず、辭には雅俗があり「俗語雅語トワカレタル品心得ベキ」（第二條）と、徂徠『譯文奎蹄』題言第十則に見える主張を展開する。次いで文章史ともいえる第三條には、南郭独自の視點が見える。文章のはじまりとして六經から書き起されるこの條は、韓・柳、李・王を軸としてはいるが、「明三百年ノ間ハ詩文モ様々嗜好有之、一樣ニハ申カタク候ヘドモ」とした上で、袁中郎・鍾伯敬といった公安・竟陵派が、李・王の學を排して興つた緒派であると南郭は認識しており、更に「清朝ニハイカカレヤ」と、中國に於ける同時代的な文章（ひいては書くということ）に大きな關心を持つている。

徂徠は、韓・柳が六朝の浮靡な文を矯め正す爲に達意を重んじ、法を古に求めたとしたが、南郭もまた、六朝の文を「誹ニ近シ」と評し、韓・柳について次のように言う。

古文ノ體オトロヘ候トテ、韓柳ハ別ニ古文ト稱シ一流ヲ書出シ候。サレドモ當時ハ二家ノ徒ノミニテ、世上ハ猶時行ノ文ニテ、宋ノ王元之ナトノ時マテモ大略同シ格ニ候。歐蘇ヨリ韓氏ヲ尊尚シ、コレヨリ古文ノ名目モ盛ニナリ、其格ニアハザルハ時文ト名付テ不用。後世マテ大抵韓柳ハ大家トモテハヤス事ニ候。

韓・柳を評價していることは明らかだが、當時は古文がその門徒を除いては受け入れられるものではなかったことをいい、韓愈を尊崇した歐・蘇の時代になつてはじめて「古文」が明確になり、時文と區別

し、韓柳八大家としてもはやされたとしている。ここで南郭は、古文と時文とを「格」により辨別したとしている。「格」とは、『文心雕龍』議對や、『顔氏家訓』文章にある「風格」と同義と捉えられるが明代古文辭學に於いて「格調」が重んじられた點を考慮せねばなるまい。南郭は、李獻吉、何景明といった前七子の主倡者が古文辭學を興した事について、「韓柳氏ハ、古ヘヨリ出候ヘドモ、イヅレモ上手ニテ別ニ一格出來候ユヘ、必竟韓氏ニ至リテ古文ハヤブレヌト稱シ、別ニ又一格イニシヘニカヘリテ書出候」と、李・何が、韓・柳の文は古から出るも、古文とは別趣の格と見做し、韓・柳よりも更に古の格調を求めたとしている。また、李・王については次のように捉えている。

嘉靖隆慶ノ時ニ至リテ、李于鱗・王元美・汪道昆出テ、古文辭ト稱シ、益々古キ格ヲ書候。王李ナドノ趣意ハ、達理修辭ノ兩事ハ、六經以來相兼ルトイヘドモ、韓柳ヲ學ブ者、宋朝ヨリ漸理ヲ多ク說事ニ成リ、修辭ノ方ハ不足。唯理サヘ明白ナレハ好ト申様ニ成行候故、其弊ヲタメ直シテ古文ニ辭ノ字ヲ加ヘテ、古文ノ辭ヲ修スルヲ第一ト書候。

「益々古キ格ヲ書候」と、李・王・汪の文を評す。李・王と並んで後七子には名を連ねぬ汪道昆を擧げるのは、徂徠と同様である。また、李・王が修辭を重んじたことを、韓・柳を學んだ者が達意に走り過ぎた爲として、その弊より救うものであったと述べるが、これは徂徠文論にも見えた。但、李獻吉・何景明からの流れで見ると、古文辭學派は、韓・柳の古文を一格と認めた上で、更に古の文辭を求めて格調高い文を書こうとした、と南郭は考えており、これが文章史の中で韓・柳と李・王を位置づけた際の、南郭の特徴である。

では、實際に文を學び、書く上で、どのように韓・柳、李・王は捉

徂徠學「文論」に於ける韓愈・柳宗元

えられているのだろうか。

韓柳王李ナトノ用ヒ様ヲ、古書ニ御考ヘ合セ、ヒタト御熟覽アルベク候。スベテ文字モ語勢モ據有様ニ用イ候ヘバ、オノヅカラ文章モ寛大ニ見エ、意味モスグ聞エ候事勿論ニ候。(第四條)

まず、韓・柳、李・王の文字や語勢を、古書に照らし合せて見る必要であると説く。また、全て根據があるように用いよと言う。古書と照し合せて韓・柳、李・王の文を讀むという點からすると、唐宋八大家として一括して扱うことには批判的で、南郭は次のように韓・柳と他の六家について言及している。

如仰八大家ト申候モ、明ノ茅鹿門ナドヨリ立候事ニテ、其實ハ六家モ韓柳ヨリ出候。然レドモ歐文ノオトナシキ、蘇文ノ働キタルナトモ、皆歷代ニ數人ノ文ニテ候ヘハ、心得ニ時々御覽アルベシ。(中略) 八大家流御學ヒ候ハバ、韓柳ヲ肝要ニ御覽候テ、六家位ニモ出來可申候。又韓柳ノ如クトナラバ、漢以上ノ古書ニ熟シ、韓柳ヲモ階梯ト見候イテ、古ニ立上リ歷代ヲ見下シ候テ書候事ニ候。(第六條)

そもそも唐宋八大家という稱は、茅坤の『唐宋八大家文鈔』にあるとし、宋代の六家は、古ではなく韓・柳から出た者であるから少し劣るとしている。この考え方は、徂徠『四家集』傳例第二則の言及と同様であるが、徂徠が歐・蘇を斥けるのに對し、南郭は、歐陽修の文の冷靜・平淡さ、蘇軾の文の瀾達さは、歷代で數名に入る文章家として時々は見るとすべきであるとしている。歐・蘇の文の評價は南郭独自のものというより、呂祖謙『古文關鍵』に、歐陽修の「平淡」、蘇軾の「波瀾」を學ぶ點として擧げるなど、常に好處とされるものである。王世貞も「子瞻の文を讀まば、才を見る。然れども書を讀まざる者に似た

り」(『藝苑卮言』卷四)と、蘇軾の學問を肯定はしないが、その才は褒める。「蘇文ノ働キタル」とは、この才に通じるものである。歐・蘇への言及からも分かるように、宋代六家の中では歐・蘇の上に位置づけてはいるが、やはり、八大家の中では韓・柳を肝要としている。韓・柳を學んだならば、大家位にもなり得るとし、さらに漢以上の古書に習熟して、韓・柳をも古への階梯として學んで、文を古に求めることを主張している。これは、南郭が古書を重視し、その格調を體得することを目指したものであろう。ではその古書とは何か。それこそが汪道昆の主張した六經(十三經)十三家(左氏註・國策・老・莊・列・呂氏春秋・淮南子・屈原・宋玉・荀子・司馬遷・班固・文選)である。

南郭は、明代古文辭家が六經十三家を「注ヲ除キテ本文ハカリヲ比年一周シ、ヒタト反覆シ見候テ、文氣ヲ助ケ、漢以後ノ書ヲ不讀」という志を立てて設けたものだとし、次のようにその意義を言う。

イカ様ニモ十三經ト右ノ古書トモヲ朝夕熟覽候ハバ、文章ノタメハイフマテモナシ。學力モ甚タ丈夫ニ成申事ニ候故、學者ノ涉ラズシテ叶ハザル物ニ候。韓柳ヲ學候モ、此外ハ無之候。(第七條)注釋を助けとはせず、十三經と古書である十三家の文そのものを毎日讀めば、文のみならず學力もつく。韓・柳を學ぶにも十三經十三家を讀む外はないとする。六經(十三經)十三家は、明代古文辭の枠に限定せずに、古を求める學者に必須の古書であるとの認識を促している。

韓・柳、李・王をどのように學んでいくべきであるかについては、次のように述べる。

文章ハ始學入時、何レニテモ、韓カ柳ノ一集一人ノ作ヲ我師ト定メ、何文ヲ書候トモ、其文ノ通ニ似習、外ニ見候書ハ助ケト定メ、段々書モテ行候内、少文章ノ格合モ手ニ入候節、又々古人ノ

内何レヲモ法ニ取テ書候ヘバ、夫ヨリ自由ニモ成行候。成就ノ上ニハ、トカク我流分ノ格出來ル物故、則一家ヲモ立ラレ候。(第八條)

まずは、韓・柳いづれかの文を師と定め「似習」<sup>にせまふ</sup>ことが肝要としている。書くうちに文章の格好がついてきたところで、古人の法を取り入れるようにする。そうすれば「我流分ノ格」「一家」ともいえる格調の備つた自分の文章が書けるようになるというのである。「似習」とは模倣であり、李・王の修辭法、そして、學問とは模倣であるとの徂徠の主張に通じるが、南郭は模倣により辭を修めそして法を學び取るという順序を設けていることが分かる。何故韓・柳より學び始めるのかという點については、「李王ナトノ古文辭ト申ハ、法度モ深ク、見エニクキ物ニ候故、先韓柳ナトノ内、法ノ見安キヨリ入候テ、其上ニテ古書ノ格ヲモ溯リヨク會得」(同前)するのがよいとしている。古書を常に傍らに置くとはいへ、學ぶべき順序として見易きものより入る、その手始めが韓・柳であり、その後李・王なのである。ここでは『四家雋』を擧げないが、『四家雋』が初學者の爲の古言・古文修得の入門書として、韓・柳(卷一・二)、李・王(卷三・一六)の順になつてゐることを考え併せると、甚だ興味深い記述である。

南郭は「答筑前井土生」(『南郭先生文集』二編卷十)で、古文辭學の修辭をめぐる古言古辭の剽竊批判を取り擧げ、次のように反論する。

夫れ文は言の修せるなり。修して而して後之を簡牘に載す。終に亦た典籍を舍きて言を爲すこと能はず。典籍多しと雖も、古を以て至れりと爲す。而して物固より至と不至と有り。則ち焉くんぞ誣ふ可けんや。若し古に因らざれば、必ず後世に因る。韓カ柳カ歐蘇諸名家カ。孰れカ陳言に非ざる。孰れカ既に朽ちるの古人に

非ざる。韓氏の陳言を去る、蓋し爲にすること有りて然り。亦た其の身之を古の時に居くと謂へり。是れ古に深き者なり。乃ち八代を超え、上周漢に視る。修する所知りぬ可し。

そもそも文は修辭にある。言を修めて（修辭して）はじめて書き表す。また、何らかの書物に倣つた文辭の修得が不可欠で、多くの書物の中で古書をすぐれたものとする。ものには、すぐれたものとそうでないものがあることについては、ないがしろにできない。もし、古書に據るのでなければ後世の文に據ることになる。韓・柳か、歐・蘇らの文に倣うのであろうか。いずれも陳言（使い古された言葉）であり、ほろんだ古人に據るものである。その點、韓愈が「惟陳言之務去」（「答李翊書」）としたのは理由があつてそうしたのであると捉える。すなわち、修辭に偏つた六朝以來の文を矯めようとしたからであり、古に身を居くという、古を志向する者であつた。古とは周や前漢の文を規範とすることであり、韓愈が修めたものがどこにあつたかを理解できよう、と南郭は説明している。この書簡は、南郭が古文辭學を陳腐とする批判に對して辯護を試みた資料とされるものだが、その反駁に韓愈の「陳言」を去つた點を取り挙げ、爲にするものであつたという理解を示していることに注目しておきたい。

### 第三章 周南『作文初問』に見る韓柳

周南の『作文初問』（成立年未詳、寶曆五年刊<sup>13</sup>）は、學問全般に言及した『爲學初問』（成立年未詳、寶曆十年刊）と對をなす書と考えてよいだろう。その點、爲學に對して作文を掲げたことの意味は大きい。『作文初問』は南郭が校訂し、文を作ることを主眼にするが、經學をも視野に入れている。本篇の構成は、周南の文論が述べられた前半部

と、『文章軌範』『文章歐冶』『文章辨體』等から抄出した「法」（篇・章・句）に關わる記述を擧げた後半部とから成る。これらの詳細は次稿の檢證課題とし、本稿ではその前半部に當る十條に見える韓・柳の捉え方に注目したい。

『作文初問』は、「秦漢以上ヲ古文トス」と、明代古文辭學の主張を踏襲する「文」の定義から書き起すが、「文章ニ定體ナシ」（第一條）、「法亦定論ナシ」（第二條）といい、周南の所謂古文とは「古文ハ法無ク、渾成自然ノ文字」（第二條）であつた。第二條に『文體明辨』卷首論文に引く唐順之の「漢以前之文、未嘗無法、而法寓於無法之中。故其爲法也、密而不可窺。唐與近代之文、不能無法而能毫釐不失乎法、以有法爲法。故其爲法也、嚴而不可犯」の箇所を抄出している（破線部は省略）。漢以前の文と、唐と近代の文との法の差異を論ずる唐順之の説を引きながら、周南はこの一節に、「法寓於無法之中トイヘバ法ヲ隱シテ手ヲ見セヌ様ニ聞ユレトモ左ニテハナシ。古人ハ文法ノ沙汰ハナシト心得ベシ」と、古文には文法の論などなかつたのだとする。茅坤の『唐宋八大家文鈔』は、唐順之の編から出ていることは周知の通りだが、唐宋派の唐順之の説を引いて論を展開することは、とても興味深い。

更に第二條では、徂徠の『古文矩』にも言及し、「徂徠先生古文矩ハ韓柳ト于鱗トノ分ヲ明スノミ。先秦以上ノ古文ヲ蔽フニ非ズ」として、韓・柳と李攀龍との違いを明らかにするだけのものとして、古文に於いて限定的に捉えている。

次に第三條では、文の作り方を順を追つて述べる。まず「題」に對して「主意」を立てる。そして何と言ひ起すのか（首）、何と言ひ展げるのか（中）、何と言ひ收めるのか（尾）と「分段」する。そこで

始めて書き下すのである。その際「心ニ任せてサラサラト書立ベシ。此場ニ苦思滯滞スレバ、一篇ノ氣脈貫通セズ。章段支離シテ體ヲ成ヌナリ」と、心に任せて一氣で書くのがよいとしている。景山の主張した「一氣の貫く文」という考えとも通じるものである。景山はそこから達意の文を主張したが、周南はそこに文の完成を見ない。次に、一度サラサラと心に任せて書いた文の辭を飾るのである。卑俚な辭を洗練されたものに改め、典雅の辭を擇び、繁冗なところを簡古に約すべきだとして、「古文ハ辭簡潔ニシテ義理深長ナルヲ貴ブ。中華ノ文モ宋元ノ文ハ冗長ナレバ試ニ古文辭ヲ以約テ見ヨ。如何程モツメラルベシ」と、古文と宋元代との文との辭を比較して説いている。徂徠が『四家傳』傳例第二則で、「歐蘇を取らざる所以の者は、宋調を以てなり、宋の失、易にして冗」と評するのと同様である。ただ周南は、一篇の氣脈の貫通を重んじて心に任せて書いた後に、古文に倣つた修辭を必須としていと理解できよう。

また、周南は、日本人が漢語を用いる際に陥りがちな、辭の繁冗支離、字句の顛倒に注意を求めている。これは徂徠が、「華和を合せて之を一にするは、是れ吾が譯學。古今を合せて之を一にするは、是れ吾が古文辭の學。」(『譯文奎蹄』題言第十則)と、(譯學)〈古文辭の學〉を主張するのと軌を一にするが、この點を自覺して古辭・雅語を綴り合せれば「自然ト文簡潔高雅ニテ義理深クナルナリ」としている。

第四條に於いて、周南は達意と修辭の問題について次のように言及している。

文章ニ修辭達意二端アリ。徂徠先生譯文奎蹄題言中具ニ論セラレタリ。畢竟、辭修セザレバ意達セズ。故ニ修辭文章ノ第一義ナリ。文ヲ作ント欲セバ、先ヅ古辭雅語ヲ多ク記憶スヘシ。胸中富

贍ナレバ筆ヲ把テ自由三昧ナリ。

『譯文奎蹄』題言第十則にある「夫文章之道、達意修辭二派、發自聖言。其實二者相須。非修辭則意不得達」という徂徠の言葉を根據に、周南は修辭を文章の第一義とする。その上で「古辭」と「雅語」を多く記憶することが、文章を思いのままに書く上で肝要であるとしている。そして周南は、明の蔣之翹注『唐韓昌黎集』讀韓集敘説に引く朱熹の「韓愈博極傳書、奇辭奧旨如取諸室中物」という一節を抄出し、「此事ナリ」と言う。周南も、徂徠・南郭同様に韓・柳の古文については、「韓柳、六朝ノ辭勝ニ懲テ鉛華ヲ削リ義理明暢ヲ尙ブ」(第七條)と捉えているが、ここでは、韓愈が博く古書を熟讀することにより、それを我が物として奇辭を驅使し得たとの認識を、周南は韓愈の修辭に對し持つていたことになる。

また、記憶すべき古書として、周南もまた「六經十三家」を擧げているが、その他に『韓非子』『水經』『世說新語』も徂徠が讀むべきだと語つたとして附記し、その讀み方にも言及している。

五經ハ經學文章ノ根元ナレバ、專ニ讀ム可シ、此外ニ左傳國語史記漢書屈子莊子文選ナルベシ。讀方、本文バカリサラサラト讀テ全部ニ涉テ記憶スルコトヲ圖ルベシ。大要ハ人人得方アル物ナレバ、其法ハ好ム所ニ任セ、イカニモシテ博ク記憶シテ緩急ニ備フベシ。文ヲ構ルニ臨テ李益ガ類祭魚ト云ル様ニ書籍ヲ搜索スレバ、精神渙散シテ工夫專一ナラズ。文章ノ氣ヲ傷フ。(第四條)

記憶の方法は個々に依るとしても、五經十三家を記憶せよと求める。文を書くに臨んで、多くの書物を展げ辭を搜すのでは、書き手の精神がちりぢりになり、文章の「氣」を傷つてしまうと説くのである。

古書の辭を用いることをめぐり、周南は韓・柳・李・王を取り擧げ

てその違いを説く。韓愈の修辭については、件の「答李翊書」の「惟陳言之務去」をその工夫として次のように言う。

韓退之ハ務テ陳言ヲ去ラ功トセリ。陳ハ陳腐也。イカナル新奇ノ美言ニテモ一タビ人ノ口ヲ經レバ陳腐ナリ。人ノ陳腐ヲ拾ヒテ文ヲ作ルハ卑シト思ヘルナリ。檀弓孟子ノ文法ヲ學ンデ文ヲ作レドモ、學ビタリト見ヘズ、自家渾成ノ文ト見ユルハ、語ヲ剽竊セヌ故ナリ。陳言ヲ去トハ、古書ノ成言全句ヲ用ヌナリ。文字ハ皆經子史集古書ニ本據セリ。然ラザレバ文典雅ナラズ。(第五條)

韓愈は文の法を『禮記』檀弓や『孟子』に學んでゐるが、他の模倣ではなく、すっかり獨自の文に見えるのは、語を剽竊してゐないからである。陳言を去るとは、古文の成言全句を用いないということだが、文字は全て經史子集の古書に本づいていて、そうであるから韓愈の文は典雅なのである、としている。周南なりの韓愈の「修辭」解釋と見てよいであらう。

一方、柳宗元に對しては次のように言う。

韓柳ト竝稱スレドモ、柳子厚ハ間マ古人ノ成言全句ヲ取用ヒテ文ヲ作レリ。獻吉、于鱗ガ開祖ナリ。然レドモ多ク古語ヲ用レバ、反テ正氣ヲ累スト云リ。古語ヲ用ヒテ鑄鍛足ラザレバ、支吾スル處アリテ、全文渾成ノ氣ヲ傷フ故ナリ。(第五條)

古人の成言全句を用いなかつた韓愈に對し、柳宗元は時に用いたとし、更にその點では柳宗元こそが、李獻吉・李攀龍の修辭の開祖であるとす。しかしながら、柳宗元は「多用古語、反累正氣」(『柳河東集』卷三三「與楊誨之」第二書)と言つたとし、それは古語を用いて文章に融合しきれなければ、こつこつつかえて文章を作り上げてゐる氣を傷つてしまうからだとしている。修辭においても周南は「氣脈の

貫通」した文を求めているのである。そうであるからこそ、第五條を承けて第六條では、「古語ヲ用ルニ鑄鍛融化作重ンズ」と、古語が文に融合されることの重要性を再度説いている。

周南は韓・柳の修辭に對する態度を、古文辭學の修辭(古書に見える修辭を會得すること)と相容れぬものとはしていない。そして、李攀龍の修辭については、逆に、韓愈の「陳言を去る」という修辭に關わらせて評している。

于鱗曰、不以規矩、不能方圓。擬議成變、日新富有。今夫尙書莊左氏檀弓考工司馬、其成言班如也。法則森如也。吾撫其華而裁其衷。琢字成辭、屬辭成篇、ト。是于鱗ガ家法ナリ。擬議ヨリ富有マデハ、繫辭傳ノ辭ヲ裁シテ文ヲ作ル。擬議ハ效法ノ義ニ取ル。即摸擬也。古人ノ成言ヲ摸擬シテ陳腐ヲ變化シテ新奇ト爲ル也。于鱗ガ意、古言ヲ陳腐ト言ドモ規矩ヲ陳腐トテ棄ラレハスマジ。古文ヲ學ババ、古言ヲ規矩トスベシ。古人ノ成言班如トシテ見ツベシ。文法森嚴ニ具リテアリ。其辭ノ英華ヲ擇ンデ取リ、其衷トコロヲ、我心ニテ裁節シテ取リ、字ヲミガヒテ辭句ヲ作り、辭句ヲ綴屬シテ一篇ヲ作ルベシト思ヘルナリ。(第八條)

李攀龍の家法として引くのは、王世貞「李于鱗先生傳」(『弇州四部稿』卷八十三)であるが、これは李攀龍「古樂府」序「滄溟先生集」卷二)で、「易曰、擬議以成其變化。日新之謂盛德」と、繫辭傳の句を掲げ、自らの擬古主義の立場を標榜したものに據る。周南が李攀龍の「擬議一日新」を「古人ノ成言ヲ摸擬シテ陳腐ヲ變化シテ新奇ト爲ル」と理解するのは、韓愈の「陳言を去る」を意識してのことであるが、李攀龍の意圖を「古言を陳腐としても規矩を陳腐として棄てられない。古文を學ぶからには古言を規矩とすべきだ」という主張として捉えて



いる。古言に明らかかな古人の成言・文法について、その辭の英華を擇び、我が心でよいものを取拾し、字を琢いて辭句を作り、辭句を綴つて一篇を作る。このような李攀龍の徹底した古言の摸倣を周南は、「韓子力陳言ヲ去ルト云フ反用シテ、別ニ韓柳以後ノ古文ヲ建立セリ。宋元ノ文章猥雜卑陋ナレバ、ゲニモ如此ナラズンバ救ヒガタカルベシ」(第八條)と評する。韓愈の「陳言を去る」という方法を「反用シテ」、反對に用いたとして捉えることに注目しておきたい。

周南はまた、ここで、李攀龍を學ぶことの意義を「其上于鱗ガ古文を學ベバ、古書ニ淹貫セザレバ能ハズ。古書ニ淹貫ヌレバ、古經明メ易シ。徂徠先生專李王ヲ推レシハ徒ニ文章ヲ高シトスルニ非ズ。經學ノ階梯ナレバナリ」(第八條)と、古書、六經に繋がるとし、徂徠が李・王を専ら推稱したのは、ただ文章を高く評價したのみではなく、經學の階梯としてであると付言している。

このように徂徠の意圖を理解した上で、周南は次のように締め括つている。

然レドモ韓柳ハ時ヲ考ヘカラ量リテ自己ヨリ出ス。其文自然ナリ。管仲ガ仁ニ似タリ。于鱗ハ一意ニ古ヲ修シ超乘シテ上リ、古人ヲ摸擬シテ作ル故、時ニ或ハ牽強アリ。善ク學バズンバ宋襄ノ仁ニナルベシ。又孫叔敖ガ優孟ナルベシ。學者ノ工夫ニアリ。(第八條)

周南からすれば、韓・柳の方が穩當で自然な文で、李攀龍のとする摸倣の方法に内含する危険性を「宋襄ノ仁」「優孟」の語を以て注意を喚起する。ここでは、韓・柳は李・王と並んで重要な位置を與えられてゐる。

周南は、韓・柳、李・王の文を読むことの意味を次のように言つて

いる。

歐陽永叔、多讀書自能文ト云リ。泛然ト博ク書ヲ讀メト云ニハ非ズ。文章ニ益アル書ヲ混讀ニ讀メバ心目文ニ熟シテ、自然ト文章ヲ噓ルト云コトナリ。唐明四家ノ集、常ニ身ヲ離サズシテ熟讀スベシ。然ザレバ古辭ヲ多ク記憶シテモ、篇章ノ結撰泥ムナリ。(第十條)

歐陽修の言は、『文章辨體』卷首諸儒總論作文法の「歐陽永叔曰、文字無他術。唯讀書多、則爲之自工」を踏まえたものである。文章に有益な書物を熟讀せよという。そして「唐明四家ノ集」を常に熟讀せよというが、これが韓・柳、李・王であることは明らかである。『四家集』の名は見えないが、これはそのまま『四家集』の意義づけに繋がると考えられる。

#### 第四章 春臺『文論』に見る韓柳

元文四年(一七三九)に著された春臺『文論』は、全七篇から成り、古文辭の弊を嚴しく述べ、「後世修辭文病」と題する付録では、李・王そして汪道昆・李獻吉の文章を材料として批判を展開する。従つて一般に、『文論』は古文辭批判の書とされる。古人の成語を綴り合せただけの古文辭を「糞雜衣」と稱したことは、よく知られるところである<sup>19)</sup>。

第一篇で春臺は、「先王の道、之を文と謂ふ。文とは他に非ざるなり。六藝の謂ひなり。」と、道と文との關係を論じ、『論語』を中心として『書經』『易經』等の文の記載に依りながら、文の淵源とその本質を説いている。中でも次の二點に言及する。

(a)孔子曰く、道に志し、徳に據り、仁に依り、藝に遊ぶ、と。此れ

君子の學の序なり。故に君子の學ぶ所の者は、先王の道なり。行ふ所の者は、先王の道なり。以て徳を爲す所の者は、先王の道なり。夫れ然る後に諸を文辭に見し、諸を事業に施す。是の故に、生きては以て廟堂に坐して政令を出す可し。死しては以て百世に血色す可し。此れ之を不朽と謂ふ。然らば則ち著述文辭は、特に君子の緒餘なり、土苴なり。

(b)古に稱す、太上は徳を立つ、其の次は功を立つ、其の次は言を立つ、是れを三不朽と謂ふ、と。故に言を立つるは功を立つるに若かず、功を立つるは徳を立つるに若かず。

(a)は『論語』述而の一章を引き、道・徳・仁・藝を君子の學の順序と定めて理解している。先王の道を學び、そして行い、先王の道で徳を完成させて、そこで文辭を著わし事業を施行するという。先王の道の實踐・施行こそが不朽の事業であり、著述文辭は君子の餘業と位置づけている。(b)では、『左傳』襄公二十四年「三不朽」を引くが、ここでも(a)同様、徳・功・言と順序を定め、立言が最下位にあることを強調している。春臺の意圖は、徳と文との位置づけにあり、『紫芝園漫筆』には次のように言う。

先王の道之を文と謂ふ。故に孔門の教へ、文より先なるは莫し。然れども文は徳を成す所以なり。故に四科の目、德行首めに居り、文學末に居る。所謂德行とは、文を學びて成る者なり。今の文を言ふ者は乃ち歸を徳に要むることを知らず。此れを本を知らずと謂ふ。(第二篇)

孔門の教えとは、『論語』述而にある「子以四教、文行忠信」をいうが、春臺は、四教に於いて文を最初に置くことについては、「所謂文者、詩書禮樂之謂也。學者先學詩書禮樂、而後可以見諸行事。故立教

則文在先」(『紫芝園漫筆』卷六)と、六藝である文を學ぶことから始めるという理解を示している。一方、先進篇の四科十哲について、德行・言語・政事・文學の順番で、德行が一番目、文學が最下位にあることを重視している。

こうした考え方に立つ春臺は、「今の學者は道に志さず、徳に據らず、唯だ文藝のみ是れ執る。其の辭を麗することを務めて其の行を修めず」(第一篇)と現状を批判し、文のみに偏した者を「文人」「文士」「文人者流」として非難するのである。

其の苟も筆を取らば、則ち宜しく仲尼の六經を修して以て先王の道を輔翼するに效ふべきなり。何ぞ區區の文曲を以て爲さんや。

凡そ人の學に志して、孔子を學ばざるは、君子儒に非ざるなり。今の學ぶ者と雖も、自ら仲尼の徒と稱せざること莫し。乃ち君子儒と爲らずして、而して文人者流と爲る。(第一篇)

李・王もまた、つまるところ「文士」にすぎぬと斷ずるに至っている。夫れ唐人の太白・子美、皆詩人に終はる。明人の于鱗・元美、好みて文辭を弄す。死に至るまで倦まず。于鱗五十七、元美五十四。終身書を讀みて、六經の旨を曉らず、聖人の道を知らず。名、文士爲るのみ。(『詩論』)

唐の李白・杜甫を「詩人」といい、明の李・王を共に生涯六經の旨を覺らず、聖人の道を解せなかつたとして「文士」と稱している。徂徠は、「李于鱗・王元美、僅かに文章の士たり。不佞乃ち天の寵靈を以てして、六經の道を明らかにするを得たり。豈に大幸ならずや。」(『與富春山人』第七書、『徂徠集』卷二十二)として、春臺と同じく李・王に「文章の士」という祝點を持つているが、徂徠はそこから六經に至つたことを言い、李・王はそのきつかけを與えてくれた人物と評してい

る。それに對し春臺は、李・王は文章に止つてしまつた「文人」として批判的に言うのである。

春臺は古文辭家の文を次のように批判する。

古文辭學の學作りてより、屬辭家一句一字必ず諸を古人に取る。汪伯玉實に焉に長ずるなり。今吾が黨の學者、纔に筆を弄することを知れば、即ち古文辭を言ふ。其の文を爲るを觀れば、乃ち古人の成語を抄して之を連綴するのみ。文理屬せず、意義通ぜず。

(第一篇)

「修辭の道は其の辭を擇ぶことを務む」(第三篇)とする春臺は、「古文辭の患は、古人の成語を用ゐるに在り」(同前)として、今の古文辭家に於ける古人の成語の使用を論難するが、その批判の矛先は明代古文辭そのものに向けられ、李・王の文章を取り上げてその破綻を指摘するのである。その批判の論點として主に三點が擧げられる。

一つには、古人の辭を用いるにしても、その辭が誰のものであるかを問はず、それが一家の専らにするものか、衆と共にするものかを審らかにしないままに用いている點にある。二つには、成語の使用が套語・歇後語という病弊を生む點である。春臺はそれらの語を「俳」「俳優」の語を以て批判する。三つには、古辭を擇ぶことに務めるが、辭を行う法を擇ぼうとしない點である。特に三點目に關しては次のように言う。

古文辭家は乃ち概して西漢以上を謂ひて古と爲して、之を摸擬することを務む。摸擬は則ち可なり。吾其の務めて古人の成語を摸ひて、之を續するに今法を以てするを惡む。是れ徒に其の辭を古にするを知りて、其の法を古にするを忘るるなり。豈に其の古を全くする者ならんや。(第六篇)

古人の成語を拾ひ用いるのに今法で綴續することを評して、辭のみ古に倣おうとして法を古に倣うことを忘れていると論難している。

このような、古文辭家の成語使用に對する批判を展開する中で、春臺は韓愈を推稱する。しかも、周南も問題にした「答李翊書」の「陳言を去る」を取り擧げてである。

大抵、古文中に奇辭奇語の讀み難く、後儒其の解を得ざる者有り。彼豈に必ず本づく所有らんや。恐らくは亦た多く其の自撰に出づるのみ。韓文公は蓋し此の祕を窺ふ。故に陳言を去りて新言を擇ぶを務む。豈に不可ならんや。要は法を失はざるに在るのみ。(第四篇)

吾謂ふ、子長より後にして能く古法を行ふ者は、其れ唯だ退之のみか、と。其の陳言を去るは、古を必とせざるなり。其の新辭を爲りて之を行ふに古法を以てするは、能く古なるなり。(第六篇)ここでは韓愈を評價するに當つて、「陳言を去る」を、「陳言を去つて新言・新辭を擇ぶのに務めた」と捉え、また「新辭を作りて古法を失ふることなく用いた」と評するのである。古文辭批判とは對照的な評價である。

そもそも春臺は「文辭は當に先ず體を辨ずべし。其の次は法を明らかにす。其の次は言を擇ぶ」(第五篇)と體・法・辭という順序を設けている。そうして文辭を作ることについて、次のように言う。

文辭を作る者は、法を古人に取りて、諸を己が心に發し、諸を其の口より出だし、然る後に諸を筆に命じ、諸を篇に著はす。苟も古人の體と法とを得て以て辭を修せば、今言と雖も猶ほ古言のごときなり。是れを我より古を作ると謂ふ。故に善く辭を屬る者は、諸を古文に取りて諸を己が口より出だし、讀む者をして其の

古辭爲ることを覺えざら令む。此れ其の文理條貫、倫有り要有るが故を以てなり。(第二篇)

古人の體と法とを修得して辭を修めれば、今言であつても古言であり、これこそ「我より古を作る」ということだとする。「自我作古」は『舊唐書』高宗紀下に見え、舊來の規範に依らず自ら先例を創ることを言うが、ここでは、古の體と法とを體得し、辭を擇び、古の文を今に體現することを言うと思われる。

ところで、右の引用文中の「出諸己口」に注目するならば、ここにも韓愈との關連性を考えておくことが妥當であろう。この表現は、韓愈「南陽樊紹述墓誌銘」(『韓昌黎集』卷三四)に、「樊紹述既に卒す。且に葬むらんとす。愈將に銘せんとして、其の家に從ひて、書を求む。…多いかな。古未だ嘗て有らざるなり。然り而して必ず己より出だす。前人の一言一句をも襲蹈せず。又何ぞ其れ難きや」と言い、「惟れ古は詞に於いて必ず己より出だす。降りて能くせずして乃ち剽賊す」とあるのと關わらせて理解したい。この墓誌銘は、紹述の多くの著作が全て自分の言葉で書かれていることに、韓愈は驚き贊辭を贈つたもので、銘には「昔、文は自分の言葉で書かれた。時代が經つにつれそうすることができなくて剽竊するようになった」という。韓愈自身もそうありたいと願ひ、それが「陳言を去る」と繋がるものであつたと解することができる。

韓愈との關連を窺わせる材料として、もう一つ注目しておきたい箇所がある。

夫れ文の理有るは、猶ほ人身の血脈有るがごとし。人苟も或いは血脈屬せざれば、則ち手足用ゐられざらん。之を癆疾と謂ふ。之を不成人と謂ふ。文辭にして理屬無き、其の不成文爲ることも亦

徂徠學「文論」に於ける韓愈・柳宗元

た明らかなり。書に曰く、辭は體要を尙とす、と。余も亦た曰く、文は理屬に在り、と。(第二篇)

これは、文には必ず理(筋道)が必要であり、それを人體の血脈に喩え、「不成人」「不成文」という語を用いて述べたものである。この語は、韓愈「答尉遲生書」(『韓昌黎集』卷十五)の「夫れ所謂文は、必ず諸を其の中に有す。是の故に君子は其の實を慎しむ。…體備らざれば、以て成人と爲す可からず。辭足らざれば、以て成文と爲す可からず」を典據としたものである。韓愈は、そもそも文とは必ずその中に本質(實)を持つており、それ故に君子はその身を慎しむものである。五體が備わらなければ、人とはならず、文辭が足りなければ、文とはいえないと言っているものであり、沈德潛はここに「文は必ず其の實に本づく」(『唐宋八大家文讀本』卷三)と評を加えている。韓愈は、文とは徳、つまり人間の本質・内面が充實して表に現れてくるものとして考へるが、春臺が「不成人」「不成文」の語を用いるとき、韓愈における文と徳との關わりをどこまで意識しているのかが問題となろう、が、少くとも『文論』中に直接の言及はない。ここでは、李・王を「文士」と斷じたように、韓愈を評してはいないということに留意しておきたい。因みに春臺の『論語古訓外傳』中には、韓愈の『論語筆解』を引いている。

### おわりに

徂徠歿年の享保十三年に成つた、春臺『倭讀要領』には、韓・柳・李・王、四家への言及が次のように見える。

今ノ學者ハ、必ズシモ八大家ヲ學バズシテ、只韓柳ヲ以テ文學ノ入門トスベシ。韓柳ヲ學テ、文法ニ通達セバ、明ノ李滄溟・王弼

州ガ集ヲ讀テ、修辭ヲ學ブベシ。修辭トハ、辭ヲ揀ブナリ。昌黎・柳州ハ、古文ノ名家ニテ、法度ノ森嚴ナルコトハ、諸家ニ卓然ナレドモ、陳言ヲ厭テ新奇ヲ好メル故ニ、其文辭古調ニ入ラザル處アリ。(卷下、學則)

當時春臺は、韓・柳の文法と李・王の修辭を學び修めることを、古文への入門と考えていたことが分かる。春臺は、徂徠の推稱する四家をとりながら、自分の學ぶべきところを明確にしていた。韓・柳については、韓・柳の法を認めながら、「陳言ヲ厭テ新奇ヲ好メル故ニ、其文辭古調ニ入ラザル處アリ。」と評する。『倭讀要領』から十年、春臺『文論』は、古文辭の修辭批判を展開するに至る。古文辭家は古人の成語を綴ることに務め、それを今法を以てする。それは「徒に其の辭を古にすることを知りて、其の法を古にすることを忘れる」もので、「豈に其の古を全くする者ならんや」と論難する(『文論』第六篇)。そして韓愈について「其の陳言を去るは、古を必とせざるなり。其の新辭を爲りて之を行ふに古法を以てするは、能く古なるなり」(同右)と評するのである。春臺の文論の變化した點を見いだせる。

南郭の『燈下書』は、春臺の『倭讀要領』よりやや早く書かれたと推定される。『燈下書』でも、韓・柳と李・王を學ぶ必要性を、實際に文を作るといふ立場から解説し、すでに韓・柳から李・王へという順序を示している。周南撰・南郭校訂とする『作文初問』に於いては、韓・柳の比重が明らかに増し、李・王より韓・柳の取つた姿勢に、文を作る上での課題の原點を考えていると言つても過言ではあるまい。その議論の特質は、「修辭」といふ立場に立つて、韓・柳の文の姿勢を評價する點にある。韓愈の「陳言を去る」、柳宗元の「多く古語を用ゐれば、反つて正氣を累す」を取り擧げ、改めて李・王の古

文辭の方法とその問題を明らかにし、韓・柳と李・王とを、古書に規範を求める古文という枠の中に、修辭を接點として統合しようとする方向を示唆している。

春臺の『文論』は明確には、李・王の古文辭の方法を批判し、『文論』と同時期に書かれた『讀李于鱗文』では、徂徠が生きていたならば「久しからずして、必ず古文辭の非を覺り、決して之を好むに終わらず。則ち其の文亦た一變せん」とまで言う。しかし、その春臺も決して修辭を否定するものではない。達意への偏りを是正しようとした明代古文辭が、かえつて修辭偏重に陥つたことを非難するものであり、枉れるを矯める者として韓愈の「陳言を去る」の姿勢を推稱するのである。春臺の文論は修辭を否定するものではなく、あらためて修辭の在るべき姿を論ずるものであろう。

それにつけても、周南や春臺に於いては、一篇の「氣脈」「一氣」の貫通を修辭以前に重視している。この點、堀景山が徂徠に對して古文辭批判として投げかけた問題を言わば取り込んだことになる。また、春臺が文論の前提に「文學」と「德行」との關わりをあらためて取り擧げる點、經學に於ける古文辭の方法とともに、儒學に於ける「文」の議論として、少くとも江戸初期からの文論の展開の中で捉えず必要があろう。

伊藤東所は伊藤東涯『操觚字訣』の序(寶曆十三年)の冒頭に、「文は心に取りて手に注ぐ。辭を達するのみ」と書き起す。「取於心而注於手」とは言うまでもなく、かの韓愈「答李翊書」において、「惟陳言之務去、曼曼乎其難哉」と連なつて見える表現である。これを達意の象徴として取る東所の言に對照させれば、今回の三者の議論に見る限り、修辭を本として韓愈を論じていることは明らかである。

また、『作文初問』には歐陽修の「多讀書自能文」という言が引かれていることは本論で觸れたが、古文辭を批判し、「文に韓柳歐蘇あるは、詩に李杜王孟あるがごとし」とする同時代の朱子學者室鳩巢も、歐陽修のこの言を引き、「翁おもへらく、歐陽公の言、平實にして味あり。文章を學ぶに、これより近きはなかるべし。」(『駿臺雜誌』卷五)としている。

これらの點、他學派との關わり等については今後の課題としたい。

注

- (1) 松下忠『江戸時代の詩風詩論』(明治書院、一九六九年)第一章第三節「王世貞の調劑論」、八七五—九〇一頁に、王世貞の「調劑」についての詳細な言及がある。
- (2) 『徂徠集』拾遺(近世儒家文集集成3)所收、ペリかん社、一九八五年)「與徳夫書」に「韓柳尙上卷、得足下一校」とある。『四家集』については、拙稿「荻生徂徠『四家集』に見える文論」(上智大學國文學會『國文學論集』30所收、一九九七年)を参照されたい。
- (3) 吉川幸次郎『本居宣長』(筑摩書房、一九七七年)附録に「屈物書翰」を収める。また、高橋俊和「堀景山「與物徂徠論文書」譯注(一)」(金澤大學『國語國文』22所收、一九九七年)、同「譯注(二)」(富山女子短期大學『秋櫻』14所收、一九九七年)がある。
- (4) 『四家集』には享保五年(一一七二〇)に書かれた「雋例六則」(『徂徠集』卷十九にも「四家集例六則」として収める)を附し、『四家集』選錄の意圖を述べる。韓・柳、李・王への言及を含む、言わば徂徠の文論が窺えるが、韓・柳を取ることを述べるも、それをどのように學ぶかについての言及はない。注記(2)前掲拙稿参照。
- (5) 日野龍夫『服部南郭傳攷』(ペリかん社、一九九九年)二〇五—一七頁

徂徠學「文論」に於ける韓愈・柳宗元

に、『燈下書』を三つの理由を挙げ南郭の作とされている。本稿では、眞僞はさておき「物家學流ノ案内ノ好書」として『燈下書』を捉えたい。なお、『燈下書』は主として『日本詩話叢書』卷一所收に據つたが、享保十九年の刊本により翻字の誤りを校訂した。

- (6) 注記(1)前掲『江戸時代の詩風詩論』四四二—八頁に、南郭の詩文論は格調説を中心としているとの理解を詳しく論ずる。
- (7) 王世貞の「才生思、思生調、調生格。思即才之用、調即思之境、格即調之界」(『藝苑卮言』卷一)の發言はよく知られる。
- (8) 『四家集』雋例第三則に「汪伯玉能得二子之心、而不沿其門牆。可謂豪傑士矣。然文少變化、千篇如一。故亦不取」と評する。「明李王汪」と三家を並べた例は、「與縣次公」第一書・二書(『徂徠集』卷二十一)などに見える。
- (9) 汪道昆『太函集』に寄せた李維楨の序文には、次のように見える。「先生之文上則六經、次則左氏内外傳、戰國策、屈、宋、考、莊、次則列、荀、呂覽、鴻烈、班、范之書、昭明之選、凡十三家法如是止矣、然而讀其文者、不以為六經十三家文而以為先生之文。何以故。」なお、徂徠は六經十三家、南郭は十三經十三家、周南は五經十三家と言うも、同一の主張と考える。
- (10) 徂徠は「答屈景山」第一書に、「故方其始學也、謂之剽竊摸擬、亦可耳。久而化之、習慣如天性、雖自外來、與我為一。」と述べている。
- (11) 注記(5)前掲『服部南郭傳攷』二六八頁に、本書簡は享保二十年と推定する。
- (12) 底本として、東北大學狩野文庫所收の、寶曆五年刊本を用いた。體裁は、漢字、片假名混じり文と、返り點・送り假名を附した漢文とから成る。引用するに當り文意の分り易さを考慮し、漢文の部分に適宜書き下して示した。
- (13) もとは「董中峯侍郎文集序」(『唐荆川文集』卷十)の一節だが、『文

體明辨』からの抄出と捉えたい。『作文初問』後半には、劉鏞、歐陽修、王世貞等の言を引くが、全て『文體明辨』卷首論文に收められているもので、周南は明言はしないが恐らくこれに據るであろう。ちなみに春臺は文の體を知る上での手本として、『文選』『文章辨體』『文體明辨』を挙げている(『倭讀要領』卷下「學則」)。

(14) 當時廣く用いられた韓愈の文集として、蔣之翹注本を想定する。

(15) 李益は李商隱の誤りであろう。吳炯「五總志」に、「唐李商隱爲文、多檢閱書史、鱗次堆積左右、時謂爲類祭魚。」とある。

(16) 周南は『作文初問』に『文章辨體』と典據を記して歐陽修のこの言葉を引く。ちなみに『文體明辨』卷首論文には、「宋歐陽修曰、作文無他術。唯讀書多、則爲之自工。」と見える。

(17) 底本として、内閣文庫所藏、元本寛延元年、新刻安永二年刊本『詩論』一卷合刻)を用いた。

(18) 拙稿「太宰春臺『文論』考」(上智大學國文學會『國文學論集』32所收、一九九九年)、「太宰春臺『文論』訓釋」(『漢文學 解釋與研究』第一輯所收、一九九八年)を併せて参照されたい。

(19) 張衡「西京賦」(『文選』卷二)には、「自君作故、何禮之拘」と見えるが、これも舊來の規範に依らず、自ら先例を創始するという意味に解せられる。

(20) 『文章精義』に「退之誌樊宗師墓、其不蹈襲前人一言一句、蓋與『鑿乎陳言之務去、曼曼乎其難哉』意適相似、深喜之」(第四十五條)と見える。また、林田慎之助「韓愈の文章表現」(九州大學文學部『文學研究』第七十二輯所收、一九七五年)には、韓愈の文章表現としての「氣」「奇」からこの點への言及がある。

(21) 春臺は『紫芝園漫筆』(卷二)に、『論語』中に文を言うのは十章、文章を言うのは二章として挙げる。それら十二章については『論語古訓外傳』に詳しいが、中でも先進篇四科十哲の件には、文と徳との關係

に言及し、韓愈『論語筆解』を引用している。春臺の韓愈理解の一端が見えると言えようが、更に検討を加えていく課題としたい。なお、韓愈の『論語』理解については、田中利明「韓愈李翱の『論語筆解』についての考察」(『日本中國學會報』第三十集)等がある。

※ 徂徠關連の資料の年代考證は、多く平石直昭『荻生徂徠年譜考』(平凡社、一九八四年)に據った。

なお、本論文中に用いた原典は正字と異體字とが混在しているが、特に問題のない限り正字に改めた。

(付記) 拙稿は、早稻田大學で行われた、日本中國學會創立五十年記念大會に於ける「徂徠學と韓愈」と題する口頭發表を基にしてまとめたものである。